

大徳寺芳春院と近衛家

川崎 佐知子

一、はじめに

晩年の後水尾院が五山僧らと巻いた和漢聯句に、近衛基熙（一六四八—一七二二）も一座した。和句だけでなく漢句もつとめ、漢では「悠」、和では「菊」の一字名で、一時に両方を詠出した作品まで残る。家集『応円満院殿御詠歌』の大半は和歌であるが、若干の漢詩を見いだせるのも青年期の修練が下地あってこそだろう。^①

大徳第一座前徳禅桂嶽和尚のもとにまかりぬるに謝偈あり感吟のあまり彼韻の字をたよりに和哥一首唐詩一絶をもてこゝろさしをのふといふことしかり

さく梅の花芳しき春に来て囀るとりも法やよろこぶ

遠出京師入翠巒 一場風物古今冠 鳥鳴花発暖霞満 識得芳春

千万歡

（『応円満院殿御詠歌』雑部 1948・1949番）

大徳第一座前徳禅桂嶽和尚のもとを訪れ、謝偈に応じた二首である。

五撰家筆頭近衛家第二〇代である基熙は、東山天皇在位の元禄三年

（一六九〇）より同十六年正月まで閑白をつとめ、宝永六年（一七〇九）に太政大臣となった。ときの重職が足を運び、詩歌応酬を記しとどめた相手とは、いったいどのような人であったのだろうか。

その人物は桂嶽宗芳、京都紫野龍宝山大徳寺の塔頭芳春院第六世である。『増補龍寶山大徳禪寺世譜』^②に記載なく、生没年などはよくわからない。語録『桂芳集』を収めた『大徳寺禅語録集成』に平野宗浄氏による解題が備わり、師の心嶽宗欽（大徳寺第二百四十六世、一六三八—一六九八）が元禄三年入寺、同十一年示寂であることから、おそらく元禄、宝永を中心に生きたのだろうと推すにとどまっている。^③

ならば、家集によりうかがい知れた近衛基熙との交歓をもとに、あるいは詩二百三十首に偈頌や讃、銘などをあわせた三百餘篇からなる『桂芳集』を手がかりに、桂嶽宗芳の足跡をたどってみようではないか。本稿は、今に埋もれ、忘れられた人と文事を掘り起こす試みである。

二、『基熙公記』における桂嶽宗芳

前田利家室芳春院（一五四七―一六一七）により慶長年間に建立された芳春院には、近衛家墓所が存する。その由来は、芳春院開祖の玉室宗珀（大徳寺第四百七十七世、一五七二―一六四一）に帰依した近衛家第一八代信尋（一五九九―一六四九）によって、本寺と定められたことによる。第一九代尚嗣（一六二二―一六五三）は、慶安二年（一六四九）十月十一日に薨去した先代の忌日に大徳寺を訪れた（『尚嗣公記』）。基熙も、毎月十一日にくわえ、尚嗣忌日の十九日の廟参を欠かさない（『基熙公記』）。さらに、『尚嗣公記』には芳春院二世玉舟宗璠（大徳寺第百八十五世、一六〇〇―一六六八）、『基熙公記』には第三世一溪宗什（大徳寺第二百一十一世、一六一八―一六八四）、第四世有峰宗恕（大徳寺第二百四十世、一六三四―一六八九）、第五世心嶽宗欽の名を認め得る。応山が築いた大徳寺芳春院との関係は、後代へと確実に引き継がれていたのだった。

大徳寺芳春院始来、先住死去之後、始来也、令対面了、

（『基熙公記』元禄十一年十二月八日条）

元禄十一年十二月八日の記事で、「先住」は同年十月十四日に六十一歳で寂した心嶽宗欽である。その示寂後、初めて来邸し、基熙へのお目見えを果たした「芳春院」は第六世であろう。塔頭名のみならず、『基熙公記』における桂嶽宗芳の初見である。

翌年以降の記事にはたびたびあらわれるようになる。

芳春院桂嶽西堂談金剛経、尤殊勝之事也、西王寺亦来、各給非時

了、

（『基熙公記』元禄十二年二月一日条）

「西王寺」住侶の大點自量も来合わせ、ともに非時食を賜った。近衛家での『金剛経』講釈はこの日に始まり、三月末までほとんど間を置かずにおこなわれている。桂嶽宗芳が加賀国へ下向した四月の間は中断するものの（『基熙公記』元禄十二年四月二日条）、常時親しく基熙のもとへ出入りすることを許されていたと考えてよいのだろう。

冒頭に掲げた和歌と詩も、同じ年に詠まれた。

早刻参詣大徳寺、時正結日也、拜御牌、後行芳春院、素純西堂、了首座等令同道、有非時、亭坊有詩、即座以和哥謝之、申刻帰家、詩哥等追而可注之、

（『基熙公記』元禄十二年二月二十九日条）

彼岸のおわりにあたる二月二十九日、参詣を済ませた基熙は、芳春院へと足を向けた。「亭坊」すなわち桂嶽宗芳の詩があり、基熙は和歌を返した。詩歌は追って記すとしている。さきに掲げた家集には詩も入集していた。当座の応答は和歌だけであったものに、後日詩を添え、あらためて贈ったということだろう。

元禄十二年、桂嶽宗芳は、基熙の日記に道号をもって記されるまでになった。以降、基熙室で後水尾院品宮常子内親王の日記『无上法院殿御日記』にも、同年九月十五日条で対面を許された「けいかく」の、近衛家内儀にしばしば訪れる模様が綴られている。品宮同腹弟で南都興福寺門跡の一乗院宮真敬親王（一六四九―一七〇六）や、近衛家門流西洞院一族で長谷末子（『无上法院殿御日記』元禄八年八月十九日条）

の興福寺多聞院英算とも通じ合った。どうやら基熙周辺の人々にも受け容れられたらしい。けれども、この交流はある日突然断たれたのだ。

晩景、興福寺多聞院英算律師上京、宿此亭、一門主被来談、言談間、從芳春院、僧来云、桂嶽今日曉遷化、但未及披露、先申左右旨也、驚歎、断言語、一門、英算等、近年知音、相共哀惜、所詮無常習、雖非可驚、就彼是、哀惜而已、其身篤実、学解莫大、道業實信、歎有餘々々、

〔基熙公記〕元禄十三年十一月一日条

多聞院英算が近衛家に宿し、「一門主」（一乗院宮真敬親王）も来邸して閑談の夜、芳春院からやって来た僧が桂嶽宗芳の遷化を告げた。急な計報に驚きながら、情があつく誠実な人柄で、底知れぬ知識を持ち、風流をも解した故人を偲んでいる。

桂嶽宗芳は元禄十三年十一月一日示寂と知れた。わずか二年足らずではあったが、その日の日記における基熙の筆を尽くした書きぶりが、両者の濃厚な交わりを物語っているようである。

三、『桂芳集』前半部題詞にみる桂嶽宗芳

桂嶽宗芳を知るもうひとつの糸口は『桂芳集』である。集められた三百餘篇のほとんどは詩で、巻首1番から230番までを占める。本稿末尾附載の「表」に掲げたとおり、『桂芳集』の題詞には年時の記される場合がある。前半の詩二百三十篇に限れば、201番「元禄庚辰（元禄十三年）元旦」、229番「庚辰（元禄十三年）中秋」とあり、230番「病

中对鏡（病中鏡に対す）」で終わっており、桂嶽宗芳入寂の年時にも齟齬しない。また、69番「奉輓有峰大和尚」は有峰宗恕の元禄二年五月十八日示寂により元禄二年とわかり、120番「壬申春病中偶作」は同五年春、155番「乙亥立春」は同八年、178番「元禄己卯試筆」は同十二年である。少なくとも前半部230番までは年代順と見て間違いないように思われる。巻頭にやや近い27番「登紫阜龍峰掛錫芳春禅院（紫阜龍峰に登り芳春禅院に掛錫す）」は、それ自体に徴証は見当たらないけれども、262番「芳春院十境詩并序」の冒頭に「貞享戊辰夏野衲掛錫於紫阜芳春禅院（貞享戊辰夏、野衲、錫を紫阜芳春禅院に掛く）」とあることから、同じ貞享五年（一六八八）といえそうである。

34・65番にみえる別源宗甄（大徳寺第二百二十四世、一六二八—一七〇九）、56・93・121・173・174番の南海宗琳（大徳寺第二百七十九世、一六五八—一七一三）、73・124・125番大心義統（大徳寺第二百七十三世、一六五七—一七三〇）、95番の端崖宗言（大徳寺第二百六十九世、一六五八—一七一）、116番の月溪宗吞（大徳寺第二百四十七世、一六四〇—一六九三）など、贈答で作られた詩も多い。「庚午（元禄三年）春」とある83番は、曾祖利休（一五二二—一五九一、天正十九年二月二十八日没）の百年忌を供養する仙叟宗室（一六二二—一六九七）に請われた。寸松堂頭大和尚（伝心宗的、大徳寺二百十五世、一六二四—一六九七）をはじめとする禅客に茶づらの大徳寺を思うが、ここは加賀侯とのつながりが機縁であろうか。

180番以降では、近衛基熙との関係が著しい。「執政左府公」の「台駕」の折の次韻183・184・185番、「陽明殿下北政所」より東大寺大仏古材の

彫像への点眼を命ぜられ詠んだ199番などは、一乗院宮真敬親王、多聞院英算、品宮常子内親王との関わりをもあらわしている。これらは、『桂芳集』前半部のうち、元禄十二年および翌十三年に限って認められる。さきにも『基瀬公記』の記述にも矛盾しない。ひとつひとつの詩を取り上げ、詳しく検討すべきところである。こちらは、稿をあらためて論述する予定である。

四、桂嶽宗芳の出自

『桂芳集』に作者の多様な交流の反映されているらしいことが見て取れた。少し桂嶽宗芳自身のことを掘り下げようと思う。

『桂芳集』284番は「駒込別荘十景」と題す。はじめに水戸徳川家の駒込別荘の景勝を掲げ、「水戸黄門公画武陵駒込別荘十景朱盃記（水戸黄門公武陵駒込別荘十景を画く朱盃の記）」を続ける。⁷⁾

駒込別荘十景

東叡山櫻 不忍池蓮 小橋霽月 遠浦夕照 林間雁塔
風外鯨鐘 坡上行人 雪後帰鴉 忍岡天神 上野文廟

水戸黄門公画武陵駒込別荘十景朱盃記

一人傑而地不靈、地靈而人不傑、地靈、人傑、古今共難得、武陵駒込之境、水戸黄門公開別荘而羅四面之秀景、構館舎而燕列国之諸侯、人傑、地靈、共兼□一難、

II 頃日画斯十景乎酒盃中、賜乎 九条幕府家臣石井右金吾校尉宇治金利、右金吾不勝感戴、招野衲、請紀焉、野衲雖未登武陵、閱盃中画図、恰若遊別荘之景、乃採毫紀其趣曰、i 東叡之嶺春色蒸霞、

櫻花滿樹、遊望却疑白雲之宿、ii 水上晒千柄之雪、風前飛十里之香、是花君子而不可褻翫者、不忍池蓮也、iii 橋上照影、橋下洗玉、水涯幽意有不堪秋、iv 遠浦雲暖、幽島沙明、夕照之貶也、誰人正得風濤之便、一點征帆萬里回、其遊此景者、孰不思此句、v 雁塔層々乎林間、而瞻者慕禪斎無塵之境、vi 鯨鐘隱々乎風外、聞者澄身世勞擾之想、vii 坡上絡繹行人不絶、出谷樵夫檐插数枝之花、問津旅客笠包幾片之雲、viii 江天雪晴夕、騷人倚欄干、帰鴉数尽、萬境轉沈々、ix 繞庭一夜之松、寄信千里之梅、東海亦格北野之神矣、x 宮殿風微燕雀高、旌旗日暖龍蛇動、闔国公儀事祭祀、上野文廟也、景也、美哉、画也、奇哉、野衲筆拙、如何形容其趣乎、若有達識之士、以意逆志、亦焉病余筆之不能尽矣、金吾舉此盃、則不去千里、而別荘風煙落盃中来、不是大賚乎、金吾曰、是為我榮非所应傲、黄門公通好於我 幕府、而致敬之餘意而已、余曰、惟若 黄門公才兼和漢、筆作春秋、於今天下之士、名一芸者無不奉用、又称忠君孝親者、蓋斯寶亦金吾以有功勞于 幕府、覃斯恩者歟、金吾其可不尽心乎、

III 童子侍側曰、師是釈門之徒、不依佛制而何故賞飲酒之器而紀之乎、曰爾余取其縁、不敢取其器居吾語汝、学戒不学慧、則其蔽愚也、戒経曰、孝順父母、名為戒、石井余家氏也、金吾余家兄也、紀家兄之美事、遠伝家孫、則是余孝之一端而已、豈曰違佛制乎、童子唯々而去、

于時元禄辛未四年朧月中浣記

(釈文)

一人傑なれども地霊ならず、地霊なれども人傑ならず、地霊、人傑、古今共に得難し、武陵駒込の境、水戸黄門公別荘を開きて四面の秀景を羅ね、館舎を構へて列国の諸侯を燕す、人傑、地霊、共に□一難を兼ね、

II頃日、斯の十景を酒盃中に画きて、九条幕府の家臣石井右金吾校尉宇治金利に賜ふ、右金吾感戴に勝へず、野柄を招きて、これを紀さんことを請ふ、野柄未だ武陵に登らずといえども、盃中の画図を閲して、恰も別荘の景に遊ぶがごとし、乃ち毫を採り、その趣を紀して曰く、

i 東叡の嶺春色霞を蒸し、櫻花樹に満ち、遊望却って白雲の宿かと疑ふ、ii 水上千柄の雪を晒し、風前十里の香を飛す、是れ花の君子にして、褻れ翫ぶべからざる者は、不忍池蓮なり、iii 橋上影を照らし、橋下玉を洗ふ、水涯の幽意、秋に堪へざる有り、iv 遠浦雲暖にして、幽島沙明なるは、夕照の眩なり、誰人か正に風濤の便を得て、一點の征帆萬里に回る、其れ此の景に遊ぶ者、孰か此の句を思はざらん、v 雁塔林間に層々として、瞻る者禪齋無塵の境を慕ひ、vi 鯨鐘風外に隠々として、聞く者、身世勞擾の想を澄ます、vii 坡上絡繹として行人絶えず、谷を出る樵夫檐、数枝の花を挿み、津を問ふ旅客笠幾片の雲を包む、viii 江天雪晴るる夕、騷人欄干に倚る、帰鴉数へ尽して、萬境轉ず、沈々たり、ix 庭を繞る一夜の松、信を寄る千里の梅、東海にも亦た格る北野の神、x 宮殿風微にして燕雀高く、旌旗日暖に、龍蛇動く、闔国の公儀祭祀に事る、上野文廟なり、景なり、

美なる哉、画なり、奇なる哉、

野柄筆拙し、如何そ形容せん、其の趣を、若し達識の士有りて、意を以て、志を逆へ、亦た焉んそ余か筆の尽すことを能はざることを病へんや、金吾此の盃を挙するときは、則ち千里を去らずして、別荘の風煙、盃中に落ち来る、是れ大なる寶にあらざるや、金吾曰く、是れ我栄と為して、応に傲るべき所にあらず、黄門公我が幕府に好を通じて、敬を致すの餘意のみ、余曰く、これみるに、黄門公のごとき才和漢を兼ね、筆春秋を作る、今に天下の士、一芸に名ある者、挙用せざるといふこと無し、又、君に忠あり、親に孝ある者を称す、蓋し斯くの寶も亦た金吾幕府に功勞有るを以て、斯の恩に覃ぶ者か、金吾、其れ心を尽くさざるべからんや、

III童子側に侍して曰く、師は是れ釈門の徒、佛制に依らずして、何故そ飲酒の器を賞してこれを紀するや、曰く、爾り、余其の縁を取りて、其の器を取り敢えず、居し吾汝に語らん、戒を学して、慧を学ざらんときは、則ち其の蔽愚なり、戒経曰く、父母に孝順するを名づけて戒とす、石井は余か家氏なり、金吾余か家兄なり、家兄の美事を紀して、遠く家孫に伝ふるときは、則ち是れ余か孝の一端のみ、豈に佛制に違すと曰んや、童子唯々として去る、

時に元禄辛未四年臈月中浣記

水戸黄門公は駒込別荘の十景を定め(一)、それを朱杯に描き、「九条幕府家臣石井右金吾校尉宇治金利」へ与えた。恐悚した右金吾に要

請され、桂嶽宗芳は十景（i—x）を織り交ぜた朱杯記をなし、右金吾の主君への忠功を讃えた（ii）。最後に侍童との問答（iii）がある。元禄四年十二月中旬に著されたという「水戸黄門公画武陵駒込別荘十景朱盃記」は、おおよそ三つの部分からなる。

九条幕府は五摂家の九条輔実（一六六九—一七二九）で、当時従二位権大納言で左大将を兼ねる⁸。右金吾石井金利は、その諸大夫である。『地下家伝』に宝永四年六月六日卒六十二歳とあり、元禄四年には四十六歳、従五位下右衛門大尉であった⁹。石井金利へ朱杯を与えられた経緯はよくわからない¹⁰。常陸国水戸藩第二代藩主徳川光圀（一六二八—一七〇〇）よりの下賜を誇りに思い、朱杯記をなすことを思い立ったのであろう。では、なぜ桂嶽宗芳に依頼したのだろうか。くわえて、なぜ朱杯記は『桂芳集』に選び入れられたのだろうか。答えは侍童との問答にある。傍線を付したとおり、石井金利は、桂嶽宗芳の兄なのだ。兄の誉れを記しとどめ、後裔に伝えることを孝とした結果なのであった。

『桂芳集』には、ほかにも出自に言及するくだりがある。232番「崇正賛」は、桂嶽宗芳が亡母真常崇正の肖像画を描かせ、それに付した賛である。

先妣孺人、道号真常、法名崇正、泉南人也、嫁故考石井氏、而生三女二男、^{點也}其季也、萬治改元十月十三日抱病卒焉、于時^點甫三歳嬰孩之際、而不記現音容、每懷哀慕矣、今載元禄三庚午、没後歳計三十有三四、使画工図真儀、聊表在堂之想、俚語恭述賛辭曰、

丈夫志氣、烈女容儀、斷機垂訓、举案齊眉、天不高^今地不厚、何貶真実報恩時、

（釈文）

先妣孺人、道号真常、法名崇正、泉南人なり、故考石井氏に嫁し、三女二男生ず、^{點也}其季なり、萬治改元十月十三日病を抱へて卒す、于時^點甫て三歳嬰孩の際、現に音容を記せず、毎に哀慕を懐く、今載元禄三庚午、没後歳計三十有三四、画工をして真儀を図かせ、聊か^今在堂の想を表す、俚語恭しく賛辭を述べて曰く、

丈夫の志氣、烈女の容儀、機を断じて訓を垂れ、案ずることを挙して眉に齊うす、天高からずして地厚からず、何れの貶か真実報恩の時、

肖像は、元禄三年に製作された。亡母は泉南の人で、石井氏に嫁し、三女二男をもうけた。病を得て万治元年（一六五八）十月十三日に没した。没後三十年あまり、母の面影を知ろうと画工に肖像を描かせたのだった。

「故考石井氏」は石井利延で、天和三年（一六八三）に八十一歳で没している¹¹。284番の兄石井金利、ほかに三人の姉がいた。桂嶽宗芳は末子で、名を點^點という。三歳の折に母の死に遭遇した。とすれば、明暦二年（一六五六）生まれかと考えられる。

五、『桂芳集』の「信長記跋」

ここまで、桂嶽宗芳がどのような人であるのかを、曲がりなりにも

たどってきた。おしまいに、『桂芳集』の巻末315番「信長記跋」を取り上げる。

信長記跋

英雄雖興於世、翰墨不記其言行、則萬世曷傳其功業乎、太和州戒重城織田内匠平長清家藏信長記若干卷、其作者太田和泉守牛一者之親書也、和泉守少仕贈左大臣信長平將、射御之外、以史才、録平將一代之實行、而不泄、夫以、平將以干戈治乱世尽忠襟仕朝家之功業昭々乎、不昧萬世、其辞朴而不華、異于世俗流布之信長記矣、此記也、舊在花房外記源政次者之家、淡水軒平一之懇求而得焉、又青木甲州家士、有太田牛輝者、牛一遠孫也、家世、秘牛一手筆泰岩事旧記二冊、元禄壬申春、長清與牛輝邂逅于駿州府城、丐獲、甚喜、長清、一日、又別得牛一親筆手日記一卷、與先所得之冊子併藏而為織田本家之家珍、長清新寫二部之記冊、寄與卑官、請收納於陽明家之文庫、卑官美其志而納写本於庫内、跋徵言於冊後、應其需者也、

(積文)

英雄世に興るといえども、翰墨その言行を記せざるときは、則ち萬世曷ぞ其の功業を伝へんや、太和州戒重城織田内匠平長清家に信長記若干卷を蔵す、その作者は太田和泉守牛一といふ者の親書なり、和泉守少きより贈左大臣信長平將に仕へて、射御の外、史才を以て、平將一代之實行を録しぬ、而るに泄さず、夫れ以んは、平將干戈を以て乱世を治め忠襟を尽して朝家に仕ふるの功業昭々として、萬世に昧からず、その辞朴として華な

らず、世俗に流布の信長記に異なるなり、此の記や、もと花房外記源政次といふ者の家に在り、淡水軒平一か懇ろに求めてこれを得、又青木甲州の家士、太田牛輝といふ者の有り、牛一の遠孫なり、家世、牛一手筆泰岩事旧記二冊を秘す、元禄壬申の春、長清、牛輝と駿州の府城に邂逅す、丐ひ獲て、甚だ喜ぶ、長清、一日、又別に牛一親筆の手日記一卷を得、先の得る所の冊子と併せて蔵して織田本家の家珍と為す、長清新に二部の記冊を写し、卑官に寄せ與へ、陽明家の文庫に收納めんことを請ふ、卑官その志を美しとして写本を庫内に納めし、徵言を冊後に跋し、其の需めに應ずる者なり、

大和国戒重藩主織田長清（一六六二—一七二二）が、所有する信長の記録を新写し、近衛家の文庫へ納めたことが書かれている。現在、陽明文庫に蔵される『信長公記』の来歴を著したものと思われる。

いわゆる『信長公記』には十六巻本と十五巻本があり、奥野高広・岩沢愿彦両氏校注『信長公記』（角川文庫²⁵⁴¹ 一九六九年初版）の底本である陽明文庫蔵本は、本記十五冊に上洛以前の首巻一冊を添える、数少ない十六冊本のひとつとして著名である。陽明文庫本には、基熙嫡男の近衛家熙（一六六七—一七三六）による元禄十二年六月上旬付けの添書がある。¹³さらに、近年、その草稿と目される文書が陽明文庫の一般文書（資料番号〈八九五三八〉）に現存することを、緑川明憲氏が『豫楽院鑑』（勉誠出版 二〇一二年）において報告した。同書には翻刻も掲載されている。末尾に「元禄十二年季夏上旬／亜三台家熙」と書かれているほかは、『桂芳集』³¹⁶番とほぼ同文なのである。

従来、陽明文庫本は、近衛家熙による菟書の結果と見なされてきたわけである。家熙の自署があり、草案まで出現したうえば、そこに疑いの目を向ける必要などまるでないのかもしれない。いま一度、315番を見直すと、桂嶽宗芳がものしたとはとても言えそうにない表現にさえ突き当たる。文末近くの二箇所用いられる「卑官」である。五山僧の自称とは言えず、当時正二位右大臣という地位にあった近衛家熙の謙遜と捉えるのが穏当であろう。

しかし、「信長記跋」はたしかに『桂芳集』に存在する。あらたに浮上したこの事実を重視するならば、またべつの考えも成り立つのではないだろうか。じつは桂嶽宗芳の代作だったのではないかと。

それまで世に喧伝されていなかった記録が、元禄五年春の織田長清と牛一遠孫太田牛輝との駿府城での邂逅を端緒に、織田家の家宝とされ、陽明家にも及んだ。わずか数年の出来事で生々しくも思える。「手筆」「親筆」と作者に由来することを強調している風にもみえる。殊更に乞うて近衛家の文庫へ納めたのと同じく、跋をも織田長清の望みに応じたのではないのだろうか。もちろん、その意を汲んで、近衛家熙が書いたと考えられないわけでもない。ただ、信長を朝家に尽くした英雄と表するあたり、元亀二年（一五七一）の焼き討ちの遺恨を抱く天台に隣接していた公家社会の属性からすれば、多少の違和感もある。

家熙署名とともにあった「元禄十二年季夏上旬」は、桂嶽宗芳がさかんに近衛家に入入りした時期とも重なる。あるいは、『信長公記』を近衛家へ取り次いだのは、桂嶽宗芳だったのではないか。その際、

織田家より求められた跋文を、基熙が桂嶽宗芳に命じて代作させ、家熙が清書し、日付と署名を添えたのではないだろうか。

『桂芳集』に収載される以上、「信長記跋」を桂嶽宗芳作と考えるのは不自然でもないように思われるが、慎重を期すべきだろう。憶測のとおりであるならば、桂嶽宗芳は書物の媒介にも関与していたことになる。

六、おわりに

晩年、河原御殿に隠棲した近衛家熙の茶会には、芳春院第八世竺嶺宗伍（一六六八—一七四六）が客人として招かれている。『御茶湯之記』では、享保十年（一七二五）十二月七日、同十一年十一月二十四日、同十三年十一月一八日の三度が記録される。¹⁵『槐記』享保十三年十月六日条には芳春院へ御成の茶会も記される。菩提所の縁だけではいようにも感じられる往來の素地は、あるいは、基熙と桂嶽宗芳のころから培われていたのではないだろうか。

幸い、桂嶽宗芳には『桂芳集』があり、近衛家の資料も豊富である。両者を照らし合わせることで、これまで、さほど注目されてはこなかった近世公家の漢字への対しかたを解明できようかとも思う。こうした見通しで、ひとまずは、不明であった桂嶽宗芳の生没年と出自を明らかにし、近衛家との関わりの一端を論述したのである。

（附記）本稿は、JSPS 科研費 JP20K00354 の助成を受けた研究成果の一部です。「近衛家の漢学」研究会での会読に多くを教わりました。

注

- (1) 『応円満院殿御詠歌』は公益財団法人陽明文庫に蔵される。近衛基熙の詠草（歌稿）をもとに、第二五代近衛基前（一七八三—一八二〇）が文化五年（一八〇八）五月に編纂した。拙著『応円満院殿御詠歌—近衛基熙の家集—』（古典ライブラリー 二〇二二年）に翻刻を掲載。
- (2) 『増補龍寶山大徳禪寺世譜』（思文閣出版 一九七九年）。
- (3) 大本山大徳寺『大徳寺禪語録集成』第六卷（法蔵館 一九八九年）。
- (4) 前掲注（2）による。更衣山西王寺所蔵『看聞秘鈔』巻五では、近衛信尋は沢庵宗彭（大徳寺第百五十三世、一五七三—一六四五）に帰依したとする。
- (5) 前掲注（2）による。
- (6) 前掲注（3）。
- (7) 『桂芳集』の引用は、前掲注（3）による。引用・釈文には適宜私に読点を付した。また、判読不能の箇所には「□」を宛てた。便宜上、私に符号、傍線を付した箇所もある。以下の引用も同じ。
- (8) 橋本政宣氏編『公家事典』（吉川弘文館 二〇一〇年）による。
- (9) 『地下家伝』は覆刻日本古典全集（現代思潮社 一九七八年）による。同書廿一に、九条家諸大夫の石井家は菅原氏を宇治氏にあらためたという。
- (10) 駒込別荘十景については、『桂芳集』のほかに見いだせていない。徳川光圀が別業の景勝を愛でたことは、つぎの記述よりわかる。
武州駒込の御別荘より、不忍池を見渡し、風色面白かりけるに、夫より御覧の為、其の趣を御門主へ御願ひ有之、東叡山の麓に桃多く御植させ、御遠望なされ候、
〔桃源遺事〕巻之五
- (11) 原祐一氏「水戸藩駒込邸の研究 藩邸内外の景観と造園の検討」（『東京大学史紀要』第二十八号 二〇一〇年三月）も参照した。
- (12) 前掲注（9）による。石井利延の後継は桂嶽宗芳の兄石井金利である。さらにそのあとを嗣いだ石井利昌（一六六九—一七〇九）にも、「金利男実利延三男」との注記が『地下家伝』にあるが、異母弟か。
- (13) 桂嶽宗芳の名は『桂芳集』88番にも出ている。
- (14) 『信長公記』については、『日本古典文学大辞典』第六卷（岩波書店 一九八四年）の同項目（笹川祥生氏執筆）に詳しい。
- (15) 『堯恕法親王日記』元禄二年八月十日条（妙法院史研究会編『妙法院史料』第三卷 吉川弘文館 一九七八年）では、信長を「元亀ノ大乱之時滅却山門之悪徒也、凶彼悪人之像事、尤非本懐」ととがめ、妙法院宮堯恕親王が信長肖像製作の依頼を断っている。
- (16) 『御茶湯之記 予楽院近衛家熙の茶会記』（茶湯古典叢書六 思文閣出版）

版 二〇一四年）による。

（立命館大學文學部教授）

〔表〕

番号	『桂芳集』題詞	備考
1・2	石山寺	
3	謝京上某甲医士惠葉	
4	寄自蓮禪友	
5	中秋值雨	八月
6	感古	
7	黄檗堂頭和尚偈奉和高韻附録尊傷	
8	送梅閑知客使東京	
9	輓壽覺信女	
10	輓潮音奇義忍禪師	
11・12	賀不染蓮公卓菴	
13	和芳公雨中韻	
14	喜自蓮禪友見訪	
15	示徽外徒子	
16	贈素中居士	
17・18	幽夢亭偶成	
19	遊芳春院遇講圓覺經賦以贈講師	
20	寄芳春會上諸位禪師	
21	寓東郊梅月居謝山公康公言公三禪兄過訪并惠雲書	
22	用前韻贈訥齋禪師	
23	用前韻贈山公禪師	
24	次山公禪師和歌之詠	
25	東郊寓居招伍公不到	
26	贈通公禪英	
27	登紫阜龍峰掛錫芳春禪院	
28	中秋	八月
29	贈珉菴医士	
30	贈泰菴医士	
31	病中偶成	
32	堂頭大和尚賜和附録	

33	再用前韻為四絶以奉呈	
34	謹次別源大和尚高韻賀芳公任侍香	別源宗甄
35	夜雨	
36	東大寺龍松上人夙抱大志營復於大像及大殿修像已成而又起乎大殿之工合国僉言古佛出世野衲合掌隨喜讚歎因不愧俚言恭賦賀詩一篇以贈	
37	贈混公俊公岐公三禪友	
38	邀三公話茶	
39	次韻台公禪兄初雪	
40	奉次堂頭大和尚雪高韻	
41・42	人日	
43	次韻柳溪処士歲旦	
44	端月念四日掛錫龍翔寺台公禪兄賜賀偈次韻以謝	正月二十四日
45	喜徵極禪師過訪	
46	次韻黃梅碩侍者歲旦	歲旦
47・48	次韻寸松珍公侍丈元旦	元旦
49	春雨	
50	謁北野天滿宮	
51	過普門寺	
52	三月初八悅溪妙喜禪定尼十三回辰堂頭大和尚有悼偈奉次高韻	三月八日
53	一日遊瑞源院即興賦山詩一律三日之後陪瑞源丈室遊閑田菴再前韻贈菴主	
54	贈良玄禪伯	
55	贈蓮民菴主	
56	次韻南海禪師贈閑田菴主	南海宗琳
57	次台公病中吟	
58	次台公韻謝贈木瓜	
59	台公用前韻作二絶賜再和共三首	
62	和瓜字三首	
65	謹奉賀別源大和尚再住龍宝山	別源宗甄

89	次韻岐公禪友九月十三夜	九月十三夜
88	老兄訥齋禪師一夜夢梅花即興得戶出梅香和歌之題字而意甚喜竟後自賦佳篇唐声原見又告歌仙詩伯請題詠點也要傲其響因謂古來賢哲一代勲功至于顯名之貶逆獲之瑞者多其事跡載典籍昭也於今老兄夢時六月下浣寒炎天梅蘂希世珍也他日德香郁々自不能掩薰爇門戶之外恰若炎天得梅梅香而為世所重必矣野作一章莫惜斧斤	
87	送格公婦東海	
86	賀不昧全公禪師住慈光院	
85	送俊公行講肆	
84	像前千氏請予次高韻俚作一章用伸筆供養云	
83	神洛千宗室居士今茲庚午春值曾祖利休老居士之百年諱辰而就于第宅後圍建廟奉像招紫阜諸禪客開齋筵薦冥福焉 寸松堂頭大和尚賦偈揭像前千氏請予次高韻俚作一章用伸筆供養云	元祿三 ¹⁶⁹⁰ 春 利休百年諱辰 伝心宗的
82	喜希声禪兄至	
81	輓貞祐比丘尼	
80	次遊修学寺御苑韻	
79	次遊慎尾平等心王院韻	
78	和遊高雄韻	
77	夏日偶成	夏
76	次椿齡禪師被惠韻	
75	台公禪兄在天龍大禪利位居板首今龍峰進表率寮山偈以述賀	
74	賀伍公轉首座	
73	贈高桐大心禪師	大心義統
72	送希声禪兄歸東湖	
71	夏日間坐偶懷	
70	同拙和	
69	奉輓有峰大和尚	有峰宗恕 元祿二 ¹⁶⁸⁹ 寂
68	次韻俊公留別	
66・67	同打睡守問二師夜話	

120	壬申春病中偶作	元祿五 ¹⁶⁹² 春
119	隣院梅花愛晚開	歲旦
118	次韻村井瑞碩匠丈歲旦	
117	次韻隣寺梅花	月溪宗吞
116	奉和月溪大和尚元旦高韻	元旦
115	分歲	
114	次韻大心寺伯英禪師首楞嚴講畢偈	
113	新竹	
112	錫杖	
111	雨中薔薇	
110	月下聽鶡	
109	佛誕生	
108	評花	
107	隣家桃花	
106	春曉	
105	花下晚步	
104	宮庭花	
103	春夢	
102	龍	
101	秉燭夜遊	
100	入室	
99	霜夜月分到頭霜夜月任運落前溪之八字作韻得落字即席	
98	水仙花會於通公寮兼題	
97	訪友不遇即席	
96	雪中梅分雪覆千山孤峰不白八字為韻得千字	
95	送端崖禪師回東海靈山軀位後	端崖宗言
94	再用前韻贈寢室号白梅居	
93	贈瑞源南海禪師	南海宗琳
92	寒窓夜雨同即席	
91	寒鴉陽月念五会高林兼題	十月二十五日
90	寄友在加州	

151	次韻奉送臨川丈室東帰		
150	次韻奉輓即隱大禾上		
149	同次丈室韻		
148	三月十九玉林精舍席上賦雨晴花更繫	三月十九日	
147	輓消蘊玄公菴 <small>主并引</small>		
146	京極定家卿四百五十年忌	定家 1162 1241	
145	又謝知己		
144	偶成		
143	花濃春寺靜		
142	梅花		
141	心訥齋禪兄招会于茶		
140	白鷺		
139	多病		
138	重陽	九月九日	
137	庭前桂花		
136	癸酉秋山公遊于須磨明石之景來為予說所經之奇勝不堪歎艷賦一律而写其所聞	元禄六 1693 秋	
135	仲秋	八月	
134	贈中靖禪兄		
133	贈中默禪師并寄綠香		
132	賀以公禪師住長遠寺		
131	梵網戒經講話了五月念九日	五月二十九日	
130	賀信公禪師住興聖		
129	賀瑚公侍丈剃髮參堂		
128	病中仲秋	八月	
127	次韻前泉湧圓岩禾上元旦贈令徒亭子律師	元旦	
126	病中途某甲医士筆一生病因而使知之題其末		
125	次大心禪師羅賢館口占之韻	大心義統	
124	次大心禪師病中偈	大心義統	
123	春夜病中	春	
122	贈南谷律師		
121	南海禪師見惠用前韻贈	南海宗琳	

178	元禄己卯試筆		
177	次韻奉輓碩翁大和尚		
176	呈空覺禾上		
175	闕空覺和尚大仲禪英伽陀二篇依其韻		
174	和俊公被贈南海禪師之詩		
173	雪後訪瑞源精舍寢室号白梅居		
172	同次山居和歌之韻		
171	和片桐宗鎮居士口号韻		
170	蒲月初五徒子誕生日一偈述賀	五月五日	
169	宗倫徒省母遊東湖婦錫已遲作詩述懷		
168	和野公歳首韻	歳首	
167	奉和看松大禾上見惠高韻		
166	述厥懷		
166	乙亥冬十月初五日雨中塵泥中見一双破屨鞋我思世間無用物無若破屨鞋因自号称破草鞋作偈	元禄八 1695 十月五日	
165	七回忌辰偈以贈		
165	以公禪師謄写金剛般若經薦先妣加宅貞祐師姑		
164	送天嶺禪師歸海西正宗寺		
163	謝加国執政房州老太守齋		
162	和聞杜鵑有感		
161	仙遊台即興		
160	和臥仙居士見惠韻		
159	賦贈 六月遊于本多臥仙居士之甲第席上見求詩一絶	六月	
158	寄安養戒山律師書師曾開山於江左創安養寺起筆而撰律苑僧宝伝偈句及此事		
157	喜雨中玉公奎公兩禪英至		
156	賀野公喝食		
155	乙亥立春	元禄八 1695 立春	
154	探分八景得山市晴嵐		
153	秋將暮		
152	九月十三夜值雨	九月十三夜	

179	次慈照丈室侍童試毫之韻	近衛基熙
180	元祿己卯夏奉迎 左相府殿下鶴駕野偈誌喜	近衛基熙
181	賀石隱木上住初山	石隱道鏗
182	芳春禪舍新構鎮守土地祠祭祀稱荷神靈 執柄殿下詣祠前有 台詠拙作恭奉和三十一字之末字	近衛基熙
183	己卯秋掃弊門奉迎 執政左府公台駕有瓊瑤之賜山詩恭奉次鈞韻	近衛基熙
184	一乘法親王翠華臨于弊院拙作謹奉和所賜祇陀	一乘院宮真敬
185	次多聞上人韻	親王
186	暮秋扇	多聞院英算
187	隣寺晚鐘	
188	円通大士開光	
189	高倉帝後宮有称小督官女能彈琴自命其琴曰時雨此器也於今歷數百歲為 陽明殿下被器重茲歲九秋雨夜設管絃宴 殿下手彈其琴使野柄賦俚詩即興賦而備 台覽	九月 近衛基熙
190	遊坂府訪原田利永茶話	
191	淀河船中偶成	
192	陽明殿下詩歌自會之題心與竹俱空	近衛基熙
193	灘声秋更急	同右
194	暮雨村橋濕	同右
195	謹奉和 陽明殿下春日法楽和歌之末字	近衛基熙
196	夏地儀初冬七日会于芳春	十月七日
197	冬植物	同右
198	尋早梅	
199	陽明殿下 北政所得支撐南京大佛銅像古材而命工匠彫刻靈像持念且使野柄開光点眼	品宮常子内親
200	次石窓和尚被賀芳春補席韻	王
201	元祿庚辰元旦	元祿十三 1700
202	消蘊玄公菴主七回忌之追懷	元旦

203	繪馬紅梅神前繪馬	
204	慈愛狗子掩土	
205	暮春十有九日庇 陽明殿下之齋請亭午飯食茶菓訖以菓天句為題有 台詠野柄亦稟命賦唐詩々就有餘興優婆塞戒為題再賦/萬縁皆已消	三月十九日 近衛基熙
206	不殺生戒	同右
207	不偷盜戒	同右
208	不邪淫戒	同右
209	不妄語戒	同右
210	不飲酒戒	同右
211	壽石元春居士七周忌一偈述追懷	同右
212	次小岩嵩公禪師韻輓固山常賢信士	
213	夏日迎南京多聞上人話茶次上人扇上之詩	多聞院英算
214	夏登西山野作二呈直指和尚	
215	本月十有二日奉稟 陽明左相府使命次得被附	十二日
216	云 一乘正覺法親王尊問索芳焚香頓首展開封函而奉領 高偈一絕之嘉惠不堪恐懼慚愧之至非德薄福□□奉蒙 尊貴大人恩渥不知所以陳謝不肖鄙拙謹次巖韻奉呈 法親王金蓮下	近衛基熙 一乘院宮真敬 親王
217	七月既望見東山大字燈	七月十六日
218	中秋 陽明殿下賞月心鈞請賦即興	八月
219	奉輓天興大禾上次韻	近衛基熙
220	因事有感	
221	秋日江東榮岳禪師過訪有佳偈次其韻	秋日
222	陽明殿下秋日遊紫竹山莊而有詠藻野言奉次尊韻	秋日
223	依 台請賦悲秋藩安仁對鏡歎白髮作秋興賦	近衛基熙
224	遊伏見中書島多門院有橋云蓬萊	近衛基熙
225	屈請普門寺証公令開講永明垂誠臨散席有偈野作次佳韻致謝	
227	柴田丈菴居士招野柄修法喜且有佳什次其韻	
228	松并序	

229	庚辰中秋七八月之間雨天不晴	元禄十三 1700八月
230	病中对鏡	
231	廬山石銘并引	
232	崇正贊	
233	復即隱大和尚書	
234	福祿壽贊	
235	李白觀瀑贊	
236	送蓮機上人遊東関序	
237	伊勢祠官延貞家藏昇仙石銘	
238	白峰宗雲禪定尼下火	
239	伏見郷中書島多門銅鐘銘并序	
240	応石芳兄招話茶	
241	同次幽居韻	
242	贈仙洲禪英	仙州宗桂 元禄七 ¹⁶⁹⁴ 四月寂
243	祝慶嶺善士六旬花誕	
244	紅楓限香一寸賦三首	
245	竹	
246	夜雨	
247	奉送堂頭大禾上北加之行	
248	送伍公禪英侍本師大禾上之加北	
249	中冬念夜訪伍公兄不遇	十一月二十日
250	寒夜与伍公岐公兩禪英同話	
251	次韻源公侍丈歲旦	歲旦
252	輓旭嶺禪師	
253	奉送龍睡禪師回東海	
254	欲赴豫州留別友人	
255	賜和用前韻以贈	
256	応伍公禪兄招話茶	
257	不味室茶話贈通公禪兄	
258	黃檗堂頭禾上六旬周手画観音大士以賜述俚讚以呈	

259	寄示桂芳南津二徒	
260	禪兄梅友迎惠公音公迪公茶話蕪言以贈	
261	又	
262	芳春院十境詩并序	貞享五 1688夏
263	高林菴	
264	杜鵑亭	
265	幽雲亭	
266	若狭河	
267	飽雲室	
268	吞湖閣	
269	打月橋	
270	通玄菴	
271	梵音樓	
272	松月軒	
273	琵琶湖十詠	元禄二 1689秋
274	唐崎孤松	
275	三井晚鐘	
276	片田漁舟	
277	白鬚夜灯	
278	比良残雪	
279	大津市井	
280	膳里江城	
281	勢多長橋	
282	矢橋婦帆	
283	鏡山秋月	同右
284	駒込別荘十景	元禄四 ¹⁶⁹¹ 十二月
285	水戸黄門公画武陵駒込別荘十景朱盃記	
286	雲樓大士贊坐于圓相中	元禄十一 1698夏
287	次隨時菴主韻	
288	蘭谿禪師三十三回之和	
289・290	藍谿宗瑛	寛文四 1664寂

316	信長記跋	
315	重刊碧岩集跋	元祿五 1692
314	自讚	
313	本源自性院禪定殿下五十回忌之拈香	近衛信尋 慶安二 1649 薨
312	普門寺聖觀音安座	
311	松雲軒	
310	自讚	
309	義山素順居士掩土	
308	輓頌翁和尚和	碩翁宗絆 元祿十 1697 寂
306	華光院前垂相掩土	醍醐冬基 元祿十 1697 薨
305	祖燈禪師三十三回忌之和	
304	同 坐圓相之中 婆慈 法橋元理請	
303	明応禪師讚 慈光院宗全請	
302	鍾馗讚	
301	猪鼻坂雨八幡八景	
300	響泉硯銘并序	
299	語以贈 義山居士薦智海公百年忌述伽陀一章乞和來拙	
298	春江院松岳宗高居士肖像讚并序	村井貞勝 元祿六 1693 秋
296・297	大仲和尚挽偈之和	大仲宗瀉 元祿七 1694 寂
295	一貫由以居士下火 域施者蒙利同成解脫之因頌曰	
294	更造寢室秋九月某甲日起工冬十一月某甲日上	元祿六 1693
293	龍谷開山澤菴大和尚五十年忌香偈	澤菴宗彭 1573 1645
292	菊応日光御門跡之求	公弁親王
291	齋藤別当実盛贊	

